

P2-055

気になる子どもに対する小児歯科外来 従事者の対応にみる支援技術

大河内 彩子¹、田高 悦子¹、船山 ひろみ²

¹横浜市立大学大学院医学研究科 地域看護学分野、

²鶴見大学歯学部小児歯科学講座

【目的】

発達障害や虐待の可能性のある子ども（以下、気になる子ども）は、障害特性や環境要因から、医療従事者が対応に苦慮することが多く、その支援技術は体系化されていない。一方、小児歯科学はデンタルネグレクトにみる虐待への気づき等、口腔内や関連の所見にみる気になる子どもへの専門性の高い支援技術を有している。本研究では、気になる子どもへの小児歯科従事者の支援技術を明らかにし、彼らの健康を保証する一助とする。

【研究方法】

2015年2月から10月にかけて、A大学附属病院小児歯科外来での参与観察と個別面接を実施し、グラウンデッドセオリー法により分析した。面接対象者は、小児歯科従事者27名（歯科医21名、歯科衛生士5名、クラーク1名；平均経験年数12.5年）である。本研究は研究者の所属する各機関の倫理審査委員会の承認を得た（A130926022、1303）。

【結果】

コアカテゴリは【気になる子どもと親のアセスメントを職場全体で繰り返しながら、子どもの歯と健康を守る最善の方法を試行錯誤する】である。カテゴリは《親を含めて子どもをみる》、《子どものアセスメントと診療が同時進行する》、《さりげなく日常生活に切り込む》、《子どもの安全と気持ちに配慮する》、《子ども全般への関わり方に特別な関わり方を加味する》、《職場全体で情報を共有する》である。サブカテゴリとして、＜親もみる＞、＜子どもの年齢不相応な理解の得られにくさや極端な反応の要因を考える＞、＜多発齲蝕の診療を繰り返しながら要因を考える＞、＜母子分離状態で診療する＞、＜子どもが答えやすく、虐待の可能性が見える質問をする＞、＜障害疑いや歯科恐怖症のある子どもにも通常通り説明を繰り返す＞、＜子どもの理解や協力が得られない時には子どもの安全を守る調整方法を行う＞、＜障害や虐待の疑いや対応上の工夫をカルテに記載し、職場全体に申し送る＞などが得られた。

【考察】

小児歯科外来における気になる子どもの課題は疑いレベルであり、障害診断や虐待の情報がない中で、面接対象者は子どもの多発齲蝕や診療のしにくさにつながる要因を多面的に探っていた。また、コミュニケーション支援を基本としつつ、子どもの協力が得られにくい時の安全を保障する必要最小限の抑制や麻酔等の医療技術が蓄積されていた。気になる子どもへの気づきや対応方法を職場全体で共有する姿勢は、他の分野にとっても役立つものである。

P2-056

幼児期の口腔の器質的・機能的問題と その要因

富田 かをり¹、高橋 摩理¹、内海 明美¹、
矢澤 正人²、関谷 紗央里²、五十嵐 由美子³、
宮内 恵⁴、平川 知恵⁵、弘中 祥司¹

¹昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座 口腔衛生学部門、

²新宿区健康部健康推進課、

³新宿区健康部牛込保健センター、

⁴新宿区健康部四谷保健センター、

⁵新宿区健康部東新宿保健センター

【緒言】

東京都某区では、区在住の2～6歳児に対し、歯と口の健康チェックとフッ化物塗布を無料で実施し、約40%が受診している。本研究では、今後の歯科保健指導をより充実させるため、口腔内の器質的問題、機能的問題と生活習慣等との関連を調べた。

【対象と方法】

対象は区から配布されたフッ化物歯面塗布受診票を持って平成26年度に区内歯科医院を受診した2～6歳の幼児3,016名（2歳児601名、3歳児799名、4歳児748名、5歳児636名、6歳児232名）である。本研究ではフッ化物歯面塗布受診票のアンケート及び口腔内検査結果を後方視的に解析して、う蝕、歯肉炎の有無、清掃状態および食べ方の各問題と食習慣、歯磨き習慣および健診受診歴などの関連を調べた。

【結果】

1) う蝕の有無の関連因子としては、間食の回数、甘いお菓子の摂取頻度、甘味飲料の摂取頻度、1歳6か月歯科健診受診の有無が抽出された。2) 歯肉炎の有無の関連因子としては、歯磨き剤の使用の有無が抽出された。3) 食べ方の問題の関連因子は問題の内容によって異なっていた。「丸のみ」は年齢、甘いお菓子の摂取頻度、現在歯数との関連が認められた。「口にためる」は年齢との関連が、「時間がかかる」は年齢および甘味飲料の摂取頻度との関連が認められた。4) 受診時に保護者から相談ごとがあった割合は約26%であり、内容は永久歯との交換、咬合、口腔習癖、歯磨きなどに関するものであった。

【考察】

甘いお菓子や甘味飲料の摂取頻度は、う蝕だけでなく食べ方の問題とも関連していることから、これらを包括した評価と指導が必要であると推察された。食べ方の問題はいずれも年齢との関連が認められており、年齢や歯の萌出に応じた食生活と歯磨き習慣を身につけていくことで、う蝕や歯肉炎の予防に努めるとともに、摂食機能の発達を促すことが大切であると考えられる。フッ化物塗布の機会に口腔全般に対する相談をする保護者も少なからずいたことから、幼児期の保健指導の上で重要な機会になっていると考えられる。また1歳6か月歯科健診を受けていないことは2歳以降のう蝕のリスク因子であったことから、健診の啓発に努めると共に、受診しなかったケースに対する対応も今後の検討課題である。